

複式指導に関するQ&A

Q1 初めて複式学級を担任しました。これからどのように教育活動に取り組んでいったらよいのでしょうか。

A 複式学級の課題をしっかりと見つめ、複式学級だからこそできることとしてとらえ直し、前向きな構えで児童と向き合っていくことが大切です。

P2・3に「教育指導上の長所」が述べられています。

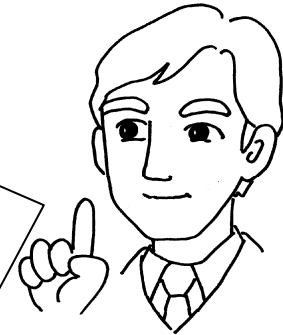
例えば、

- 個に応じた指導がしやすい。
- 体験活動の場が数多くある。
- 上級生が下級生の世話をよく行う。

などがあります。この他にも、

- 直接指導できない場があるので、学び方が身に付く。
- 人数が少ないので表現力が育つ。

というように、一人一人を生かす教育の原点が複式学級にはあります。



Q2 複式学級における学級経営は、どのような考えで取り組めばよいのでしょうか。

A 学級経営の在り方は、単式学級と本質的な違いはありません。

P7～9に「複式学級における学級経営」が述べられています。その中に「複式学級の特性を十分理解して・・・。」や「2学年1学級という学級編制がもたらす指導上の長所や課題について熟知し・・・。」とあるように、複式学級の特性やよさを理解した上で、1つの学級として両学年を育てる視点に立った手立てを設定することが必要になります。



例えば、第5・6学年の学級編制の場合

6年生は最高学年としての自覚と責任を身に付けさせ、5年生には、6年生を見習いながら高学年としての見通しをもたせることができます。そこで、両学年を育てる視点として「高学年としてのリーダー意識」とし、その手立てを設定していくことができます。

しかし、これまでの生活や学習経験の違いを考慮して、6年生には締めくくりとしての意識をもたせるなど、学年に応じた言葉かけを行うことも必要です。

Q3 一人一人の実態を詳しくつかむことができますが、児童相互の刺激が少なく、競争心などを育てにくいなど、人間関係の固定化や個人差への対応はどうすればよいのですか。

A 人数が少ないことから、児童との直接的な触れ合いの場を多くもてるので、この点を最大限に生かして、一人一人に対する一層の理解に努めることが大切です。

表面上では問題がないように見えても、児童の内部でしっくりしないことも見られます。そこで、

- 表面的な現象だけで判断せず、注意深く指導する。
- 児童に共感的な立場に立って理解を進めることが大切であり、その児童の側に立った手立てや支援を構想する必要があります。



人間関係の固定化や個人差に応じた指導の工夫

- 学習等の公的場面と休み時間等の私的場面の区別をしっかりと教え、相互の向上心を高める。
 - 指導する事柄を精選し、取り組む時間を十分に保障する。
 - 役割を固定化せずに、輪番制で色々な役割を全員が繰り返し経験できるように配慮する。
 - 自己目標を設定させ、それに向かっての取組を充実させる。
- といったことが考えられます。

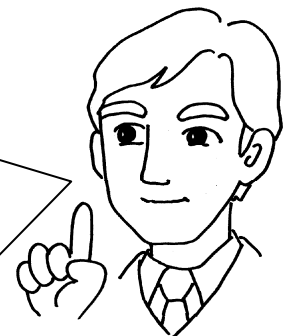
Q4 直接指導の時間が短いので、十分な指導ができていないのか心配です。自ら学ぼうとする態度や能力を育てるための学習指導はどうすればよいのですか。

A 自分たちで解決の努力をする学習習慣が身に付くような複式学習のルールを決めて徹底させることが大切です。

複式学習のルールとして、

- 誰かが話しているときは、きちんと最後まで聞く。
- 間接指導時は、教師に指示された問題を自分または友達同士で解く。
- 分からないことや困ったことがあった時は、すぐに先生を呼ぶのではなく、まずは自分で考える。それから、友達と相談する。
- その場に合った適切な声の大きさと話す。

といったことが必要になります。





P59からは「学習指導方法の工夫・改善」が述べられています。これらを参考に学習指導を充実させていくことが大切です。

その中でも、複式学習のルールの定着に向けて、特に大切な授業展開のポイントを次に示しています。

ルール定着のポイント

- 課題をしっかりとつかませること
 - ・課題をしっかりとつかませる工夫として学習計画を示しておく。
- つまずきを予想し手立てを用意しておくこと
 - ・つまずきが予想される場合には、ワークシートに工夫をしたり、学習のポイントを示したりしておく。
- 学習を振り返り評価すること
 - ・教師の評価に加え、児童の自己評価を大切にしながら意欲の継続化を図る。



これらのポイントがはっきりとした授業を展開していくことで、児童のルールも定着していくことにつながります。

Q5 学習指導において、他の教員との連携をどのように図っていけばよいのですか。

A 年度当初に校内での指導体制を構築しておくことが大切です。

P28・29に「指導の効果を高めるための指導方法の改善」として、指導の効果を高めるために教頭が必ず授業を行うことが述べられています。

複式指導の解消を図り、指導の効果を高めるためには、教頭の教科指導に加えP45から述べられている「指導形態」など、様々な工夫を凝らし、校内外の他の教員との連携を図ることが必要です。



他の教員との連携を図るうえで担任が留意すること

- 放課後や休み時間等を利用して事前の打ち合わせを行う。
- 学習中の状況について情報交換を行い、指導の工夫・改善を行う。

情報交換の時間がない場合には、「連絡ノート」を活用し、児童の様子を記録してお互いに伝えるなどの工夫が必要です。

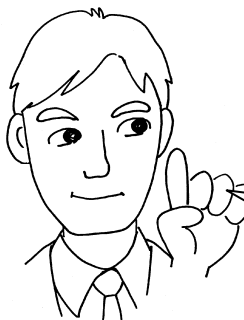
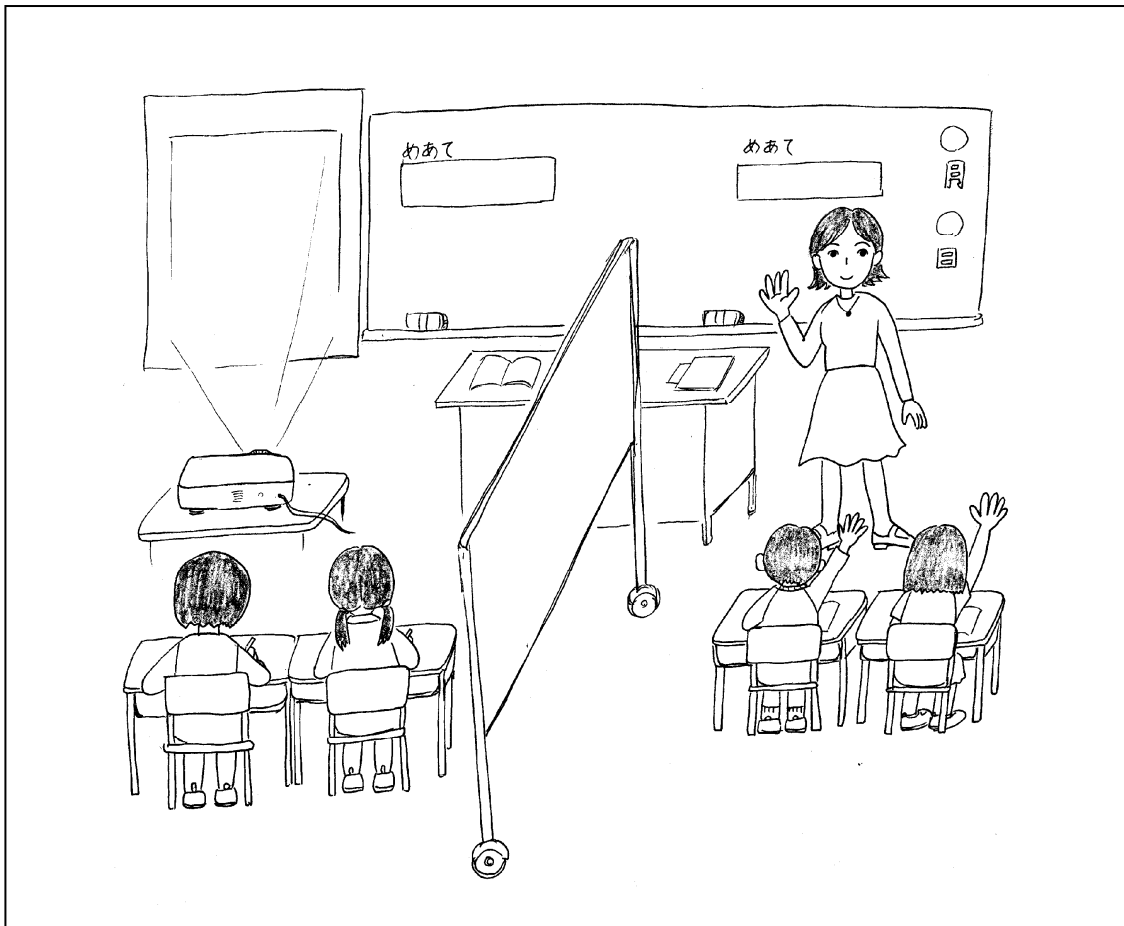
Q6 複式指導において効果的な教室環境はどのように整備していけばよいのですか。

A 黒板や机の配置、教育機器の導入など、複式ならではの工夫をすることが大切です。

P62から「発問や板書の工夫」、「教育機器を活用した学習指導」などが述べられています。児童も学びやすく、教師も「わたり」やすい教室環境にしていく必要があります。



※ 教室環境の例



考え方を支える効果的なものとして、

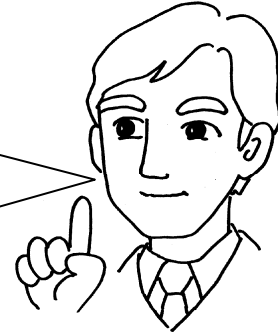
- タイマー・ストップウォッチ
 - プロジェクター・実物投影機
 - 貼り付け方式のホワイトボード
- などがあります。

Q7 少人数においても多様な意見を引き出させるには、どうすればよいのですか。

A 多様な考えを「多くの考え」という量的なとらえをするのではなく、授業のねらいに迫るための「必要なものの見方や考え方」という視点に立つことが大切です。

P57に「各教科の指導計画作成上の留意点」に述べられているように、学習をとおして到達させたいねらいを教師が明確にもつことが必要です。

多様な意見を引き出すための工夫については、次のことが考えられます。



多様な意見を引き出すための工夫

- 見方や考え方の方向性を示す工夫
見通しのもたせ方や教師の発問、教材提示の方法に工夫をします。P63に述べられている「動画を活用した学習指導」の工夫を行うだけでも児童の考えは広がります。
- 感じ方やとらえ方の違いを生かす工夫
考え方の似ている点、違っている点を明確にする働きかけや教師の発問に工夫をします。また、教師自身が児童になりきって質問をしたり、意見を言ったりすることで児童の思考を促すことにつながります。

Q8 間接指導において児童の活動が停滞しないようにするには、どうすればよいのですか。

A 日頃から児童たちが互いを認め、高め合う雰囲気をつくりあげることが大切です。

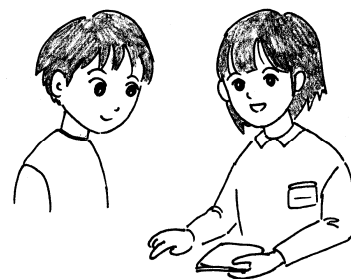
P53・54の「間接指導」に述べられているように、間接指導改善の視点をもとに工夫を行う必要があります。中でも、「ガイド学習」を充実させていくことが特に大切になります。そのためには、1・2学年から、「ガイド学習」を意識した授業を展開する必要があります。



ガイド学習を充実させるポイント

- 教師はガイド役と事前の打ち合わせ、授業中の打合せ（特に、時間が余った時の対応の仕方や発表された意見のまとめ方について）をしっかりと行い、自信をもって進行できるよう支援をします。

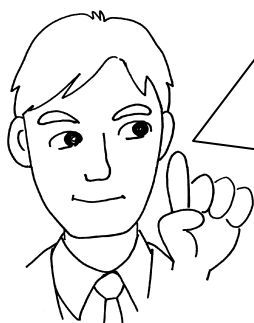
- 初期の段階では、P54にある「ガイド学習の手引き例」をもとに、教師がガイド役をやって見せるなど、比較的容易な学習活動の場面から始めます。
- 基本的な仕方が身に付いてきたら、「学習プラン」を全員に理解させたくて、間接指導において学習を進めさせます。ガイドがつかずいても、お互い助け合って学習を進めていけるよう事前に指導しておきます。また、必要に応じて「わたり」をしながら支援を行うことも必要です。



全ての児童にガイド役としてのリーダーを経験できるように指導しましょう。

Q9 間接指導における評価は、どうすればよいのですか。

A 前の時間までの一人一人のつまずきや本時の支援のポイントをきちんとつかんでおいたうえで、評価を行っていくことが大切です。



間接指導における評価は難しいものがありますが、P67の「評価方法」に述べられているように、「作品による評価や自己評価、相互評価」を工夫することが必要です。

また、児童の実態と本時のポイント踏まえたうえで、発表に使った「ホワイトボード」、または「児童のノート」、さらには「自己評価カード」を見ることで、児童が自らの伸びを実感できるような教師の言葉かけを、折に触れ行うことが必要です。

Q10 2学年分の教材研究を行うときの工夫は、どうすればよいのですか。

A 効率的で効果的な校務遂行に心掛けながら、教材研究の時間を生み出し、次年度への引き継ぎを意識していくことが大切です。

効果的と感じたフラッシュカードなどの教材・教具やワークシート、写真や教科書の挿絵を拡大したものなどはきちんと整備しておき、次の担任へ引き継ぐことが必要です。

2学年分の教材研究は負担になることもありますが、複数学年にわたる教材研究をすることが、教材の系統性や発展性のより深い理解につながり、教師としての資質を高めることになります。

